

〔物類稱呼<sup>四</sup>衣食〕雜炊、ざふすい、河内及播州邊にて、びやうたれと云、加賀越中或は但馬にて、みそづといふ、越前にて、にませと云、伊勢にて、いれめしと云、東國にて、ざふすい又、いれめしといふ、婦人の詞に、おちやといふ、又京都にて、正月七日の朝、若菜の鹽<sup>と</sup>饅<sup>を</sup>を祝ひて食す、これをふくわかしと云、大坂及堺邊にては神棚に備たる雜煮、あるは飯のはつは等を集置て、糝<sup>こがき</sup>に調へ食す、これを福わかしと云、こながきとは俗にいふ雜水也、土佐の國にては、正月七日雜水に餅を入たるを福わかしと云、武江にては、正月三日、上野谷中口護國院に福わかし有、大黒の湯と稱す、男女群參すること也、

〔貞丈雜記<sup>六</sup>飲食〕一、ぞうすいも古よりあり、上臈名の記に、女の詞にぞうすいをおみそうと云よし見へたり、是はみそうづと云事を略したることば也、正月祝儀飾の繪に、正月七日七草の御みそうづのこと見へたり、足利殿御代は、七草はかゆにせずしてぞうすいにしたるなり、是將軍家の御家風なるべし、世上如此にはあらざるなるべし、七草のかゆと云事は、古よりありし也、

〔諼草小言<sup>三</sup>〕雜水 俗ニ飯汁混淆シテ、煮食スルモノヲ云フ、其名古ルシ、内則ノ飲モノ、中ニ濫アリ、鄭註ニ、濫以諸和水也、陸德明曰、乾桃乾梅皆曰諸 正義曰、案漿人六飲有涼註云、涼今寒粥若糗飯雜水也トミエタリ、

〔守貞漫稿<sup>後集</sup>食類一〕雜炊<sup>古ヨリ有之、足利家ハ七種ノ粥ヲ用ヒズ、七種ノ雜炊ヲ用ヒ御ミソウツト云、御ミソウツハ女詞也、</sup>

今世京坂ニテハ、男女トモニゾウスイト云者專也、江戸ニテハ男女專ラオジヤト云、於茲也、字未詳、是モ實ハ女詞ナルベシ、

今制雜炊ハ味會汁ヲ以テ米ニ葱ヲ交ユルヲ、京坂ニテ子ブカゾウスイ、江戸ニテ子ギゾウスイ、其他三都トモ、種々菜蔬ヲ交ヘ定リ無之、

又京坂ニテハ、カキゾウスイヲ食ス、味會汁炊也、蠟ヲ交ル也、是ヲ雜炊ノ上製トス、又京坂正月〇